



## シヤム國橋梁本邦側に落札す

長谷川久一

九ヶ國の強敵を向ふに廻はし、難なく之を打ちまかし、躍進工業日本の進出を如實に證據立つるに至つた勝利の吉報が、本月はじめに、わが鐵道省に齎らされたのは、特筆すべき近來の快心事である。國際聯盟で、わが國のよき理解者であつたシヤム國が、同國の國有鐵道百六十四箇所の鐵橋を全世界の橋梁製作業者に公入札させる旨を公示したのは昨年八月の交であつた。この入札に参加した諸國は、英、米、佛、獨、伊、白、和、丁、ルクセンブルグ及び日本の十箇國、會社は英の有名なドルマンロング會社を始め二十

四會社で、夫々設計の優秀と價格の低廉さ等の諸要件で激烈なる競争を演出したが、餘り輕量な設計は實施上に不安があり、その點で英のドルマンロング會社の見積りは斥けられ、又餘り重量の大なるは、價格不廉にして、それがたゞめ佛のペノー會社のは採用せられずして、結局わが鐵道省官房研究所長山田隆二技師を始め、沼田、稻葉兩主任技師の苦心になる原設計に、日本製鐵、川崎、横河、石川島四社の分擔見積りの結果になれる入札が、中庸宜しきを得たるものとして、公平無私なる技術的検討の下に落札するに

至つたのである。國際工業オリムピックに此の大捷を博し得たるは、全く設計、材料、工作、運送のすべてに完全なる官民一致と統制との行はれたる賜物であつて、深く慶賀の至りなると同時に、從來兎角東洋諸民族の間には、互に相親しむべきに拘はらず、そこに何となくかけ隔てがありたるを打破して、茲に親善の橋渡しをなし得たるを特に祝福したいと思ふのである。

アルフレッド・ヘットナーに従へば、近代及び現代は、地球のヨーロッパ化の時代である。まことや海に於てはサラミス、陸に於てはポアチエーの戦をもつて、アジアのヨーロッパ征服は徹底的に絶望となり、能働的、積極的なヨーロッパ人は、漸次に世界各地にまで發展して行つたのである。彼等は實にすぐれた兵器と戦術とをもつて居たし又他民族よりも遙かに發達した工業をもつて居た。さればこそ近代から現代にかけて彼等は世界交通と世界商業を支配するやうになり地球は遂にヨーロッパ化されるに至つたのである。之に就ては英、佛、蘭の諸民族が先づ、先鞭をつ

け十九世紀に入つてから、新たにドイツとイタリーとが參加して來た。元來この兩國は航路發見時代以前に於ては、世界商業に於て最大の役割を占めて居たものである。喜望岬をめぐる印度航路の未だ發見せられない時代に、イタリー一の諸港市や、ドイツの諸港市は繁榮した。併しこの二國は海外發展、植民地經營には、著しく立ちおくれたのである。即ち蒸汽時代とも云はるべき十九世紀に於て、汽船と汽車とが發明せられ、交通が頓に容易となつてから、始めて植民地經營、外國貿易にまで進み出るやうになつた。畢竟この二國は、その位置が大洋からはなれてゐること、國內が政治的に分裂して居て、中心的勢力が軟弱であつたがためであつた。さればこそ、交通機關が進歩をつけ、この兩國をして容易に大洋と連絡せしめ、又國內が政治的に統一されるやうになつてから、地球のヨーロッパ化に参加することになつたのである。

以上の諸國は皆海を越えて他の大陸に發展して行つたが、ヨーロッパの諸國中ひとりロシアのみは、陸路東方に

向つて伸びて行つた。ロシアは十六世紀の中葉からシベリヤに向つて侵略の歩を進め、十七世紀の末には、カムチャツカに達し、遂にアジアの地に廣大無邊なる植民地を獲得するやうになり、最も有力な植民國の一となつた。シベリヤ鐵道の敷設は、歐亞兩國に跨る架橋となり、更に其の領土慾は、南下して朝鮮に爪をのびさんとして、ゆくりなくも日露戦争となり、終局の奉天會戰に依つて阻止せらるることとなつたのは、已に周知の通り今より三十年前の事なのである。

シベリヤ鐵道が歐亞兩大陸間のかけ橋として開通するや、ここにスラヴ民族の東方進出が盛になり、東亞の天地に準ヨーロッパ式都會たるハルビンや浦鹽斯德等が現出せしめたのであつた。而して一方パナマ運河の開通は、大西洋文化時代をして今や太平洋文化時代に進化せしめんとする情勢となつて來た。同運河は、スエズ運河の延長百哩なるに比し、約其の半分の五十哩餘の延長に過ぎざるも、後者の水準式なるに反して、閘門式なるとクレブラ・カット

の難工事とのため、建設費は、後者の三千萬磅に比し、倍額以上の七千五百萬磅を要した。この運河開通の結果は、李浦より桑港へは六千餘哩を、紐育より桑港へ八千四百餘哩及橫濱並にシドニーへ夫々三千七百餘哩を短縮したから、世界的の捷徑を現出することとなつた。是に於てか、高度文化の最高段階を示す地球のヨーロッパ化は、現代世界交通の實相であつて、從來水の砂漠ともいはれて、交通の妨害となり、諸民族の境界であつた大洋は、今や自由の通路となつて、諸民族を結ぶ橋梁となつてしまつたのである。從來地中海をもつて、人間の住居する世界の中心と考へて居たヨーロッパ人の地理的思想はここに一大變化を遂げて、ヨーロッパとヨーロッパ以外の諸地方との經濟的、精神的結合は、はるかに緊密となり、世界交通、世界經濟世界文化の時代を招來するに至つたのである。さればこゝにアジア諸國は相互間にアジア同志の結合をはかることとなり、何れも皆ヨーロッパの諸強國に依存することとなり、アジア諸邦間の連鎖は、益々弱まる一方とならんとするに

當り、ここに北鐵は、滯りなく滿洲國に譲り渡されることとなり、滿洲國皇帝陛下の御來朝があるやら又シヤム國政府は、入札價格約廿萬バーツ餘(約三十萬圓)の橋梁を本邦より購入することゝなれる等、まさにこの動向を逆轉せしめたるものにして、ヨーロッパ文化の世界支配に對して有効なる通行禁止を喫せしめたる次第と謂はなければならぬ。いかにヨーロッパ民族の世界化の勢旺盛なりといつても、他地方民族の自然的環境と既存の文化とに依つて制約せらるべきことは敢て論は俟たないのである。アジアの諸民族と雖、受容能力がその飽和點に達したときには、そこにヨーロッパ化の行詰りと之に對する反抗とが起つて來るに相違はない、今日シヤム民族がヨーロッパの九箇國二十四會社の見積りを、容赦もなく振りすて、わが鐵道省及び民間橋梁製作業者の日本式橋梁設計を採斥するに吝かならざりしは、曾つて昭和六年に一回、見本的に一、二同國鐵橋を施工して以來的確に日本文化即ちアジアに咲き出でしアジア本來の文化を受容せんとするの時世がここに轉換

し來りしを示すものに他ならない。アジア民族の覺醒即ちその識見の向上は、今後、機關車、貨車の供給及び修繕、道路工事其の他百般の土木工事に至るまで、範を我が國にとり、益々日本化の實の擧がり行かむことを切望せざるを得ない。最近同國では、山田長政の遺跡保存に意を用ひ始めた等日暹間親善の着々として行はれつつあるのは、特に悦ばしき次第であると同時に、シヤム國のみに止まらず他のアジア諸邦も亦漏れなく然かあらむことを飽く迄も希望して已まざる次第である。——一〇、三、一五——

房州所感

小島溪泉

連嶼寒雲散 沙汀破浪風

孤舟探蒼海 魚躍碧玲瓏

香閣依巖峽 妙音入定空

黃鸝歌苑樹 忘機在其中